

会 議 録

- 会議名 平成 27 年度第 3 回佐賀県総合教育会議
- 開催日時 平成 27 年 9 月 1 日（火）13 時 30 分～14 時 30 分
- 開催場所 佐賀県庁新行政棟 4 階 特別会議室 B
- 出席者 （知事部局）山口知事、西中統括本部長
（教育委員会）古谷教育長、浦郷委員、牟田委員、森田委員、
小林委員、音成委員
（事務局）落合総括政策監、木島政策監、古賀政策監 他
- 議題 (1) 教育における I C T の利活用状況について
- 議事録

1 開 会

（落合総括政策監）

お揃いになりましたので、ただいまから平成 27 年度第 3 回佐賀県総合教育会議を始めさせていただきます。本日の進行を務めます統括本部統括政策監の落合です。宜しく申し上げます。

本日は 2 時半までの約 1 時間を予定しております。本日のテーマは、教育における I C T の利活用状況について、ということで意見交換をさせていただきたいと考えております。開会にあたりまして、山口知事の方からご挨拶をお願いいたします。

2 あいさつ

（山口知事）

本日、総合教育会議の第 3 回の開催にあたりまして、教育委員の皆様には、大変お忙しい中お集まりいただきまして、お礼申し上げたいと思います。ありがとうございます。

前回の会議では、佐賀県の教育、生涯学習、文化、スポーツの振興に関する施策について総合的に推進する指針となります佐賀県教育大綱について、貴重なご意見を賜り、無事に策定することができましたことについても、お礼を申し上げるところでございます。この教育大綱に基づきまして、引き続き、知事と教育委員会が連携、協力

して、佐賀の人づくりにしっかりと取り組んでいきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお話ししたいと思います。

さて、今日の会議のテーマは、ICTを使った教育についてでございます。私はこれまで、多くの県民の方とお話しする中で、本当にICTが効果的に使われているのか、現場の教員もきちんと消化しながら授業が進められているのか、鉛筆を動かすことが疎かになっていないか、国の動向はどうか、入試がどうなっていくのか、など様々なご意見を承ったことから、教育委員会の方で検証をお願いしたいという風をお願いしたところであります。

今日は、教育委員会の事務局の方から検証状況を報告してもらうことになっておりますけれども、まだ途中ということでございますので、その前提で皆さんと意見交換させていただきたいと思っております。本日の議論なども踏まえまして、さらに検証を進めていただければ幸いです。私からは以上です。

3 会議事項

(1) 教育におけるICTの利活用状況について

(落合総括政策監)

早速会議に入りたいと思っております。最初に教育委員会の方から、教育におけるICTの利活用状況について、検証の途中経過報告という形になろうかと思っておりますけれども、ご説明をお願いします。資料を前渡しされておりますので、10分程度で簡潔にお願いします。

(福田副教育長)

教育委員会事務局の福田でございます。画面が少し小さいですので、お手元の資料を見ていただいても結構でございます。まず、佐賀県では先生方の校務用パソコンの導入に始まりまして、昨年、平成26年には県立高校全校で、生徒1人1台の学習用パソコンの使用を始めております。

平成27年度は、これまでの取組をもう一回振り返るとともに、今後に向けて、改善、充実、定着に向けた取組をしていきたいということで、現在、学校訪問、そして教育委員会による学校への意識調査とともに、先程ございました事業改善検討委員会を設置して、現場の声を聞きながら、改善、充実に努めているところでございます。

事業改善検討委員会の委員といたしましては、表の上半分が学校関係者 9 名、途中の色が着いているのが座長の佐賀新聞社富吉賢太郎様、そして、下段の 5 名がいわゆる有識者ということで構成をしております。これまで、5 回の会議を開催して、委員の皆様からの意見を頂くとともに、県の教育委員会の考え方等をまとめてきたところでございます。

全体 15 項目にまとめておりますけれども、これにつきましては、事前に資料を見ていただいているということで、細かくは説明いたしません。特にその中で、まず一番最初ですけど、これは学校の先生方から出てきた意見として、有用性を十分理解出来ない教員がいるという意見がございました。これにつきましては、我々としては、これまで国の動き、大学入試の動き、または高校生に使わせる理由等について、いろいろと説明をして参りましたが、そういったところに、まだ、不足感があつたのではないかとということと受けとめておりまして、現在、改めて説明等に努めているところでございます。

続きまして、使うことを強制しているのではないかと、または、使うことを一律に全員の教師に求めているのではないかと、といった声もありました。これにつきましては、黄色の所に書いておりますけど、昨年度は県立高校全校への導入初年度ということで、学校の方では、各教科で、また教員毎に、それぞれ使い方については工夫をなささいという指摘をしておりましたが、これを受けた先生方にとっては、使えと、使うんだよ、と言われたという風に受けとめられたのではないかと考えており、プレッシャーに感じたという教員がいらっしゃったということは、改めて今回掘り起こして把握出来たところでございます。これにつきましては、改めて学校長等を通しながら、または研修の機会等に、自分の教科、教育内容、また学校の教育目標に応じて精査をしていただきたいと強調しているところでございます。

それから、保護者の方からは、高等学校での一律の導入についての意見がございました。学習用 PC を現在保護者の方に購入していただいておりますけれども、購入する必要性がまだ十分理解出来ない、要はまだストーンと落ちてないというご意見を頂きました。これにつきましては、我々とししましては、高等学校では筆記用具、教科書等は全て個人で持って、個人で自由に使っていただいておりますので、こういう学習用 PC についても、個人の持ち物として、データの出し入れ、または、学校内、学校外等でも使っていただきたい、使っていただくものだということで、導入を進めておりましたが、保護者の方から見ると、もっと使ってほしい、また、もっといろん

な使い方ができるんじゃないか、ということを期待されていることから、もう少し頑張っただけという声だと受けとめております。

それから、ここに出ておりますけれども、これは、今年の、導入初年度の4月に教材のインストール、また、教材の削除等で、マスコミ等にいろいろご指摘を頂きまして、保護者の方からも頂きました。当初は教材のダウンロードに時間がかかりましたので、これについては、ダウンロード方式から、購入時には既に教材が入っているスタイルに変更しました。それから、教材の使用期間も1年から在学期間中まで延長するというので、ほぼほぼこれについては解消できたと思っておりますけど、さらに、より良きものになるように、現在、教材会社と協議を進めているところでございます。

それから、機器トラブルについても、沢山の意見がございました。機器トラブルについて、先生が授業中に対応しようとする、非常に厳しいものがあると。そして、もう一つは、機種の問題、スペックの問題、そして、一番大きかったのは、ネットワークの問題、これがございました。これは、改めて、現在、学校訪問等を教育長中心にやっておりますけども、子供たちからも、授業中に、場合によっては繋がらないことがあると。そうすると、その瞬間、先生が、繋がらないために授業を中断したり、または子供たち自身が、「えっ」と思う瞬間があるということで、これについては現在、改めてネットワークの構成等について検証しているところでございまして、一日も早く解消したいと思っております。先程ございました教職員がこのネットワークのトラブルとか、機器トラブルに忙殺されているということについては、今年4月から、全校にヘルプデスクの現地員を置いて対応することで、先生方の負担感についてはかなり軽減できたのではないかと考えております。

セキュリティについても、導入当初は保護者の方から、または学校現場から、セキュリティソフト等を使ってある一定の制限をかけることで、変なサイトにいたり、または、犯罪に巻き込まれたりすることのないようにという声もあり、セキュリティを強めておりますけど、逆に一方では子供たちからは、もっと自由に使いたい、もっと自由に使う場面があるんじゃないかということで、声があがっておりますので、これは改めて学校現場、それからPTA等と協議をしているところでございます。

それから、先程申しました国の動きにつきましては、先般、平成26年12月に中教審第177号による答申が出され、8月末には文科省作業部会から新しい大学入試の方向性等が示されて、現在、作業状況が出ましたけど、現在の中学校1年生から新しい入試制度に移行するというので、コンピューターを使った試験形式とか、これまでの国語、数学、英語といった単教科の試験から、教科横断型の試験が導入される等々

についても、国の方で積極的な審議がなされていますので、こういったことも学校現場、また保護者の方に伝えていこうということで、現在、資料等を用意しながら取り組んでいるところでございます。

それから、最後になりますけど、学校現場の声をまとめますと、電子黒板については、やはり、非常に有用性が高い、すぐにでも、もっと使いたいという声が行先しております。一方で、2番目の情報端末、いわゆる学習用PCにつきましては、先生方が、これまでの自分の授業の流れだけで考えた場合には、限界があると言いますか、使用にまだまだ食い足りない部分があるという声があります。一方で、先程申しました、学習指導要領の改定の方向性とか、国の動き、いわゆる新テストの方向性から、アクティブラーニング、協同学習、または生徒一人一人に応じた新たな学びということ考えた場合に、この学習用PCについては有用性が高いということで、昨年と比べれば、学校現場の先生方も、大分使うことに対して積極的になってきたのではないかとこのように考えております。ということで、学校現場で現在進んでいるのは、国語、数学、英語という教科活動の中での使用については、これまでの教育の流れがございまして、無理強いをすることなく、また、画一的になることなく、先生方が学校の教育目標に応じて、また、目の前の子供に応じて使っていくべきものという捉え方で、新たに整理をいたしました。一方で朝のホームルーム、または、総合的な学習の時間など教科を離れた学習の場等については、国が申しておりますように、情報活用能力、またはコミュニケーション能力等の育成に向けて活用できるものということで、改めて現在整理をしながら、取組の充実を進めているところでございます。

これは、各学校の現在の使用状況についていろいろな場面を想定したものでございますけど、例えば英語活動で、例えば体育の授業で、例えば数学等で、いろんな活用が現在進められつつあるということでございます。これも、先程申しましたように、これを画一的にやりなさいと、またはやれと言ってしまうと先生方は負担に感じる、また、これまでの教育との連続性から考えた場合にいかなものかという声があることも事実でございますので、現在精査している状況でございます。

これは、特別支援学校でございますけど、下の方に写真を3つ付けております。左の下の上の方が、知的障害のあるお子様が、いわゆるタブレットパソコンを使って、漢字の書き順ソフトにチャレンジをしている写真です。その下の方は、これは肢体不自由のお子さんで、重度重複障害があり、かなり重い障害ですけど、いわゆるタブレットパソコンに、自分で信号を加えること、例えば、電子ペンでつつく、または、ちょっと触れるということで、自分の意思を表示することで、これまでは先生に自分の

意思を伝えることができなかつたものが、かなり意志が伝わることによって、学習に対しても意欲的になつたという報告がなされております。その右の方は、病弱なお子さんですが、どうしても病弱の関係で毎日学校に登校できる状況ではなく、何時間かは学校に来るけど、何時間かは自宅で学習をせざるを得ない。これも、過去は自分で、紙の教科書を使って勉強するだけだったんですけど、現在は、テレビ会議システムを使って学校から先生が自宅にいる子供を指導しており、こういった場面で使われているということで、かなり、有用性は高まっているという報告を頂いております。

国の方で、2013年6月に制定されまして、いよいよ来年4月から施行されます障害者差別解消法につきましては、いわゆる発達障害、または、そういった障害をお持ちのお子様等に対して、これまでは努力目標だった合理的配慮が、今後は義務として課されます。そうした場合にも、ICTの利活用については、いろんな意味でも可能性があるので、現在、取組の充実に努めているところでございます。以上でございます。

(落合総括政策監)

簡潔な説明ありがとうございました。ここから、意見交換に入っていきたいと思えますけれども、今日は何か結論を得るというよりも、意見交換して、今後の検証作業の方にも活かしていただくという主旨で、率直な意見交換をしていただければという風に思っております。よろしければまず、森田委員さんの方から、教育委員さん側から、ご意見を申し上げます。

(森田委員)

私自身は、障害を持った子供たちに対してなんですけれども、うちの息子もそうなんですけど、パソコンを使うことによって、あまり、うまく喋れなかつたりとか、あと、聞き取りがちょっと、聞こえが悪いといった時には、パソコンとかを使いながら、表示することで対応することが出来たりというのがありましたし、実際にパソコンを使うことで、これから先、生活していく上では、とても有意義じゃないかなという風に実感しています。

特に、障害を持った子供さんで、障害の度合いにもよりますでしょうけれども、ICTを使って自分なりに勉強できる子供さんもいらっしゃいますが、重い子供さんについては、やはり画面にもありますように、手の力が弱くて筆圧が出ない子供さんと

かには、タッチパネルを使いながら書いたりとかすることで、自分のものにもなりますし、また、コミュニケーションも取れるということもあると思います。

また、遠隔授業ですけれども、中原の方でも一人いらっしゃいまして、学校に毎日来たいけれども、来られない子供さんは、ICTが入る前は訪問教育といって、学校から先生が週に3日とか行かれて、授業を1時間くらい教えて戻られる。学校に来て、午前中、通常の4時間まるまるはこなすことが出来ないの、やっぱり2時間だったり、体力を考えながらやっているという状況が通常だったんですけれども、ICTを入れることによりまして、その子の時間を先生がきちり確保されているので、その中で出来る範囲で、やり取りをしながら授業をされています。また一人じゃなく、同じクラスに2人、ないし3人とかいらっしゃった子供さんと、意見を交わし合ったりする場面が見られたりするの、とても障害を持っている子供たちにとっては有意義ではないかと思えます。

また、知的障害や精神的な障害のある子供については、授業を行う時間についても、ICTを使いながら、あとここまで授業すればこの時間は終わりというのが、目からの情報でわかるようになりました。前は一つ一つ写真を撮って、さらに手書きしていたのが、今はICTを使いながらやれているということで、とても、そういうところはよかったという風に聞いております。

ただ、特別支援学校の子供たちに対しては、学習用PCは備品という扱いで、一人一人持てないという状況にあります。中にはですね、やっぱり自分のパソコンとして家に持ち帰り、保護者とのやり取りだったり、自分がやることをしたいんだけど、それは学校の備品なので、家に持ち帰れないということで保護者の方は、やっぱり欲しいと思って普通のお店に買いに行くと、とてつもなく高くて、という話であったり、普通のマウスは対応できない子供さんが、その子に合わせたマウスを購入することによって、パソコンをうまく出来るようになったという話もあります。ただ、それはやはり学校が買うとなると備品になってしまうので、卒業した後も使えるように保護者が自費で購入したりというところがあります。でも、そうすることによって、パソコンが使えるようになれば、作業所にそのマウスを持って行くことによって、例えば、名刺作成であったり、のし袋の名前書きであったり、自分で作業所に行って、仕事をする事も可能になってきます。そういったところを考えると、もう少し子供たちに合ったものを、個人で持てるような状況を検討していただけるととてもいいのかなという風に思います。

一つ聞いたのは、金立特別支援学校に意思表示ができない子供さんがいらっしゃるそうなんですけれども、やはり、パソコンを使うことで、僅かに動く指で、親とのコミュニケーションとか、先生とか、看護婦さんとのコミュニケーションが取れるようになったりとか、自分の思いを文章にしたりとかが出来るそうなんです。ただ、それも購入するとなると、とてつもなく高いと。でも、その子にとっては、それがあつて自分で自分の意思表示もできるし、また、皆さんともやり取りが出来るというところが、その子にとってはとても大事なことなので、そういったことも、もう少し検討していただけると有難いかなと思ひながら、学校の子供たちの様子を見てきました。

(落合総括政策監)

ありがとうございます。続きまして、牟田委員さん、お願いします。

(牟田委員)

私はですね、パソコンは授業を補完するものだと思つております。授業はやっぱり、35人～40人の生徒に対して行われるもので、すると、どういうレベルを目指しているのかというと、平均的な人間より上の方をやっぱりどうしても中心に教えると思うんですよね。そうすると、出来る子供はつまらん。出来ない子供はわからん。やっぱり、そういう授業になってしまうんじゃないかと思うんです。実際人が多いから。それを補完するのが、このICTじゃないかと僕は思っています。

だから、実際はソフト次第だと思うんですよね。つまり、あるものを教える、それに対してそれがわかっている子供は、より高度な問題を解いていっていい。それがわからない子供は、その解説を見る事が出来るといったようなそういうことが出来れば、ICTというのは、非常に授業を補完できるいい手段だと思います。

それは、うまくいけば、今ちょっと話題になっていますけど、小6、中3のテストみたいに、平均点、つまり、ボトムアップが出来るから、また、平均点が上がっていくというんですかね。上は大概どんどん勉強していくから、ボトムアップすることが大事だと思うんです。そういう意味で、授業を補完する手段として、ICTはいいんじゃないかと思つております。もう佐賀は既にハードは揃つてきたでしょうから、あとはソフトと、それを使いこなせる教師の問題じゃないかと思つております。以上です。

(落合総括政策監)

ありがとうございます。浦郷委員さん、お願いします。

(浦郷委員)

現場の先生方の様子については、さっき、福田副教育長からもお話がありましたけれども、私も現場の人たちと話をしてみると、実際的な使い方というか、そのことについては、どんどんどんどん慣れ込んできて、いろんな当初あったような抵抗がないような状況になってきつつあるので、やっぱり、あとは時間の問題かなという風な感じを受けております。

そうした中で、今すぐというのは、これはとても無理ですけれども、大変有効なこのICT教育について、少し先のことを申し上げると、さっき副教育長の方から説明がありました通り、例えば、新テストみたいなものが想定されております。そういった中で、今までみたいに国語とか、数学とか、理科とか、英語とかいう教科単位で何かをやるのではなくて、もう教科を統合しながら力を試していくという風な方向に間違いなく行っている現実があります。例えば、数学と理科を統合する形で、数理探求みたいなものとか、あるいは歴史についても、今までみたいに世界史、日本史、地理と言わないで世界史と日本史を統合して、近現代史をやっていこうとかいうような科目設定が間違いなくなされるような状況であります。これはもう他の教科、例えば選挙の年齢のこともありまして、従来の公民が公共という形で統合的に事を扱うとかですね。国語にしてもそうですね。そういったことが今、現実的な問題として議論されている。そういうことに対応するという意味では、今、佐賀県で先進的にやっているこのICT教育というのが非常に有効だと思います。今のところ、学校現場を見ると、国語の先生が国語の授業を、数学の先生が数学の授業をとという風な事で、今、一生懸命使いこなしつつある訳ですが、あれをもっと教科を統合するような形での使い方に持っていく必要があるんじゃないかと思います。まだちょっと時間のかかることではありますけれども、そういった目標みたいなものを持って進めていくということが必要だというのがあります。

それから、あと一つは、今、このパソコンの使い方にしても、先生方がどういう風に使いこなして授業に活かすか、みたいなことが中心に議論をされていますけれども、このICT教育で本当に必要なことの一つは、生徒たち自身がそういった情報機器を使いこなしながら、いろんな情報を得て、物事を考えていくという風な、そういう方向性が必要だと思います。今、教員サイドのことが議論されている訳ですが、もっと生徒諸君にとって、どういう有効、有用な使い方があるかという風な、そうい

う方向性みたいなものもどの時点かできちんと持っていかなければいかんだろうと思います。今聞いておりますと、学校である程度パソコン使いながら授業等を行って、家に持ち帰ってそれをどうしているかという点では、まだまだ生徒諸君は様々な形でそれを使用している状況にはないようです。ですから、その子供たち、生徒諸君が、今後、どういう風にそれを使いこなしていくのかというような、そういう発想からの取組も必要だろうと思います。

それから、ここにおられる皆様方をご承知の通り、このICT教育については全国に先駆けて、佐賀県で先進的に取り組んでいるところであります。私もいろんな会議とか、会議じゃない所でも、県外の人と話す時に、佐賀県は凄いね、といったような話を聞きます。凄いねというその話の裏側には、大変だねというのがある訳であります。先の見えない中で、今、我々佐賀県は取り組んでいる。従って、いろんな困難な場面も当然ある訳です。その辺もきちんと踏まえながら、進めていく必要がある。他県に先駆けて、将来に向かって必要なこういう教育を佐賀は行っているといったような、そういう意味では誇りと言うんでしょうか、そういう誇らしい思いを持ちながら大変な状況に耐え、頑張っていくという、そういう風な形で進めていかなければいかんかと思っております。

それと、最後ですが、この頃学習調査の発表があって全国平均に足りてないということではいろいろな議論もやっていますが、基本的にはそういうものにあまり振り回されないようにというか、さっき牟田委員さんの方からもあったように、やはりICT教育みたいなものの中で、なかなかいろんな理解が進んでいない子供たちを引き上げていくことによって、自ずと結果も出て来ると思います。ただ、ICT教育を始めたから、すぐに学習状況調査の結果がよくなるかというものではないことは、当然のことなんです。振り回されないように、しかし、きっちりと子供たちに力をつけていくという方向を確認しながら進めていかなければいかんかと言う風に考えております。以上です。

(落合総括政策監)

ありがとうございます。小林委員さんお願いします。

(小林委員)

よろしく申し上げます。私は高校一年生の息子がおりまして、まさに、今年の4月から持っています。私も学習用PCがどんなものかというのがよくわからなかったで

すし、どういう風な活用をされていくのかという、とても期待感を持って息子を入学式から見てきているところです。ちょっと息子に、今どんな風に使っているかっていうのを聞いたところ、思ったよりは授業で使っている頻度とか、家でする課題の頻度というのは少ないんですけども、出来る範囲の中で使われているんだなという意識を持ちました。

つい保護者の方は5万円もかけて買うんだから、もう全てが授業の中で取り組まれていくんだらうと、期待感の方が大きすぎて、実際あんまり使っていないんじゃないかという声もあったりはするんですけども、先生方のそれぞれの使い方があると思うので、あまり無理されずに、でも、せっかく買った物ですから有効に使っていただきたいなあと思っているところです。

浦郷委員さんも言われたんですけども、息子の使っている様子を見ましたら、やっぱり学校で与えられた使い方だけしかまだ使っていないんですね。私は何かICTを使うことで、もっと自分の自分なりの世界を持って、いろんな探求をしていけるような道具の一つになると思っていますので、生徒自身がどんな使い方をするか自分の知識を深められるか、学力を上げられるかとか、子供自身が有効な活用方法を見つけていけるように、これもいずれはそうなるかもしれないですけども、そんな風に使って欲しいなあと思いながら、見せてもらっています。以上です。

(落合総括政策監)

ありがとうございます。音成委員さんお願いします。

(音成委員)

私は、皆さんの意見をいろいろ聞いていて、一番いいのはやっぱり共存型授業、電子黒板と黒板、タブレットと紙というような併用授業が一番理想じゃないかなとずっと思っていたんですね。多分知事さんにも、福田副教育長にもそうだと思うんですが、『ザ・黒板』っていう本が送られていませんか、お目通しはされていませんか。実は、加藤昌男さんというNHKの元アナウンサーで、現在NHKの放送教育センター、研修センターの日本語センターの専門委員をなさっていらっしゃる方が、『ザ・黒板』っていう本を出されて、それがたまたま先週送られて来たんですね。というのは、何年前かに講演でいらして、うちの方でお食事をされて、いろいろお話をしたりしまして、送られてきたのは多分、福田副教育長さんの佐賀県の事例が載って

いたからじゃないかなと思います。お手紙に書いてありましたけど、こういう本を出しましたと、佐賀県もICTに取り組んでいらっしゃるのということでした。

私が教育委員をしていることは、全然ご存知じゃなくて送られて来たんですけど、すごくなんか、「はあ」と思うような事がいっぱい書かれていたんですね。その中で、佐賀県の事例も書いてありました。その後に、墨田教育委員会の事が書いてあって、ここは、もうもっと前からICT利活用教育に取り組まれていて、すごく上手い具合にICTの利活用をなさっているところらしいです。どうしてなのかなと思ったら、すごく無理なくICTを取り入れていらっしゃる。それは、ICTを推進する合言葉で、3つの「も」を使っているとおっしゃっています。その「も」とは、ICT「も」活用できる教師になろう、ICT「も」活用して分かる授業をする、ICT「も」活用できる児童生徒を育てる、この「も」が大切で、この「も」を使うことによって、そんなに無理なくICTを導入出来る。ICTというのは教育活動をサポートする道具であり、もちろん充実させる手段ではあるんですけども、活用の仕方次第では、やっぱり21世紀を生きる力を育む可能性を持った道具であるから、どんどん使う方向にはいきたいとそう書いてあって、ああなるほどなって、本当にまさにこういう事だなんて思いました。どうなんでしょう、墨田教育委員会の事も参考にされていたんでしょうか。そういう事も書いてありました。とても良い本を読ませていただきました。是非、山口知事も参考になると思います。そういうように、これから無理なく進めるには、3つの「も」を大事にしながらいったら、上手いことICTを取り入れられるんじゃないだろうかということでしたので、なるほどと私も思いましたし、皆さんもご参考になればと思っております。

(落合総括政策監)

ありがとうございます。教育委員さん方のご発言を踏まえて教育長からお願いします。

(古谷教育長)

これまで、それぞれ委員さんの発言を聞いていたら、ICTに向き合ってきた年季が違うなと思いました。私自身もICTというのは、授業とかあるいは生徒の学習とかそういう教育の質の向上につなげる為のあくまで道具の1つだと、これはもう間違いないだろうと思っていて、その利用自体を目的とするのではなく、教育効果が期待できる部分で有効に活用していくと、それが一番重要であろうというのが基本認

識です。そういう意味では、さっき副教育長から説明がありましたけれども、学校現場等で強制されているというような受け取りがあるとすれば、そのあたりはしっかり解いていかないといけないと思っています。

今年度、県立高校では本格実施2年目ということで、改めて、実際に取り組んでみる課題も含めて、現場の声も集めて必要な対応を取り、また今後対応することも検討しております。昨年度、初っ端に起きましたデジタル教材のインストールの時のトラブル、あるいは、使用期間が各年度で終わるとアンインストールしなければならないとか、そういった課題については、ほぼ解消する事が出来ているという状況です。

今年の5月には有識者、学校の代表者の方とか、保護者の代表者の方、あるいは教職員組合の代表者、そういった方も含めてICT利活用教育の事業改善検討委員会を立ち上げて、今5回ほど開催させていただいて、それを受けて事務局の方でもいろんな作業を進めております。教育委員会では、これまでも、アンケート調査とか学校訪問に指導主事が行ったりして、いろんな現場での課題は聞いていますけど、聞き漏らしが無いのかとか、あるいは、現場の教員が優位性を充分認識して取り組んでいるかどうか、あるいは、ICT導入が心理的な負担になってないのか、改めて学校現場、生徒あるいは、保護者からの意見を聞き入れながら改善に努めているところでございます。今後ともより良い活用が出来るように研究して、それを進めていく為の環境整備、あるいは改善を図って、教育委員会と学校現場が同じ方向を向いて取り組んでいけるような支援を我々としてしっかり進めていって、学校の取組を支えていきたい。基本的には、そういう風に考えています。私から以上です。

(落合総括政策監)

ありがとうございます。福田副教育長からの説明と、それを踏まえたご発言を教育委員会の方から頂きましたけども、そういったものを受けて、山口知事の方から何かご意見ありますか。

(山口知事)

その前に統括本部長から何かあれば。

(西中統括本部長)

今、各教育委員さんのお話を聞いて、皆さん言われていることに共通しているなと思ったのが、音成委員さんがICT「も」と言われた話ですけれども、まさにそのプ

ラスアルファの道具・手段そういうところなんだろうなと思いました。そこは共通の認識としておありなんだなと改めて感じましたし、私自身もそういう認識でこれまでみておりました。

「も」のところ、プラスアルファとして何を求めるかという話になってくるかと思えますけれども、その部分で言えば、浦郷委員さんが最初に言われましたように、これまでは教科ごとにやっていた話を、教科を統合するような形でできるその時に使えるんじゃないですかと思います。

実は、一度、ICTを使った教育のデモンストレーション授業というのを体験させていただいた事がありまして、その時は、授業としては漢文の授業だったんですけど、その時代背景として、その書かれていた時代がありますよね。その時に中国はこういう感じだったんですよということで、世界史の話が入ってきたりしていたんです。私が高校生だった頃の授業では、多分それをやろうと思っても無理なんですけれども、そういう使い方ができるんだなって新鮮に思った記憶があります。まさに今申し上げた話というのは、プラスアルファとして期待されるところで、そこはソフトの話になってくるんですかね。そういうところは、これから先、高校生になる子供を持っている親としてはですね、是非、自分の高校時代より充実した授業にしてもらえればなという風に思います。

後は、やっぱり牟田委員さん、小林委員さんが言われましたけど生徒自身が、如何に工夫しながら使えるものか。もちろんいろいろネット社会の中で問題というのがあるのは承知していますが、今の高校生とかさらにその下の世代というのは、私なんかからみてもICTを皆さん使っていますね。それを使いこなすことで、自分の能力を発揮する機会というのをみつけることが出来るんじゃないかなという風にも思うので、そういう場面をどれだけ広げていけるのかっていうところが、もう一つ期待されることかなという風に思った次第です。以上です。

(落合総括政策監)

ありがとうございます。知事の方からよろしいですか。

(山口知事)

私の自分の体験から考えると、何年前かな、東大で教えたことがあって、その時は30人くらいで誰もパソコンなんて机の上には置いていなくて、お互いに意見交換をしながら、どう思うとか、僕が黒板で何かやっている間も、生徒の方からも、ああここ

うだって、結構鋭い突っ込みが入ってきたりしながら、そうやって授業が成り立っていたんですよね。その他に僕は毎年SFCという慶應の湘南キャンパスの方でも、年に何回か呼ばれて教えていたりするんだけど、そっちの方は全員パソコンなんですよね。そこでは、みんなが下を向いて、俺が一生懸命やっているのにな。「みんな」って言うてもこうやって下を向いて、みんな何をやっているのかな。検索したり、場合によってはつぶやいていたりとか、僕が言って分からない事を調べていたりするのも知れないけど、なんとなく「ちょっとパソコン置こうよ」って言って話を展開しないと彼らはずっと下を向いている。

そういう経験があるもんだから、ICTというものは本当に使いようで、いい面もありますよね。先生と話しながら、調べ物がすぐに出来たりする。普通は手を上げて聞くって訳にはいかないんで、それぞれの良さ悪さはあるんでしょうけれども、いずれにしても、やはり教育っていうのは人を育てることなので、これに振り回されてはいかんかと現体験からは思っています。

簡単に言うと、折角これがあるのにどうやって使おうかって、みんなで考えているうちに、いつの間にかあれ、教育ってなんやったけどこいつに振り回される様なことになるという事はあっちゃいかんかという風に思うわけです。

だから、本当に皆さん方の話を聞いていても、使いようなのでこれは。その部分を佐賀県が先にいっている訳だから、まだそれこそ他の県がまだ泳いだことも無い所を今泳ぎながらやっているんで、そこをどういう風に考えていくのかなという事で、これを上手く活かしていかないといけないなど。いつも言いますが、教育っていうのは取り返しがつかないので、その子たちにとっては一回きりの高校生活だし、だからその部分をどう折り合いをつけていくのかなあという風には思っているところです。

(浦郷委員)

振り回されないようにせんといかんというのは、まさにそうでしょうね。やはり教員、教師がいて生徒がいて、そこでの実際的な気持ちを含めた、やり取りがないと、実際的な効果は現れないと、そう考えた時にパソコンをどういう風にどう使おうかという事で右往左往していたのでは、教育はきちんとなるはずがない。そういう事は、教育委員会の中でも雑談の中ですけれども、話題にしたりもしました。

その中で私が言ったのは、例えば、今、高校でもシラバスみたいなものを持っているんですよね。授業をどういうふうに展開しようかというものですが、そういった

ったシラバスみたいなものの中で、例えばその学校の教科教科でパソコンをどういう風に使えば効果的か、みたいな事がある程度セットすることも必要じゃないかと、要するに、今、知事が言われたように、下を向いてパソコンを見ているような時間ばかりだったら、どうしようもありませんので。でも、それはそれで有効な道具でもあるので、使うべき時には使わないといかんという事であれば、その点がある程度、形として事前に話し合いながらやっていくような方法をとらないと、パソコンパソコンとなってしまうよね、という話をしたことがあります。

現実には、今じゃあシラバスの中で、ある程度この単元の時にはこういう風にパソコンを使ってやろうよというのを、どの程度まで決めるべきかというのはいろいろありますけど、でも、そういうのを決めておくと、下を向いてパソコンを使っている時と、きちっと先生の顔を見ながら聞いている時と、そういう区別が出来て良いんじゃないかなという話はした事があります。今その湘南の下を向いてばかりという話を聞いて思い出しました。そういうものを少し、あまりきちんとじゃなくても良いんですけど、ベースになるものがある程度みんなで、取り決めみたいな物を作っていないと、やはり個々の先生方にとっては難しい状況になるかなあとと思います。

(山口知事)

福田さんに聞きたいんだけど、例えば、先生と生徒のキャッチボールの中で、音成さんが「も」とおっしゃいましたよね。ICT「も」あると。要はその一つの武器を持っておかないと、この武器をどう使った方がいいのかというような話し合いみたいなのは行われているんですか。

(福田副委員長)

実は教育情報課に指導主事を置いて頂いた時に、小、中、高、国、英、数、社、理と置いて頂いています。学校教育課の指導主事はどちらかというと、現在の教育をどうするかなんですけれど、うちの指導主事は、今後どうするかという事で、学校現場からも、実はご存知かと思えますけれども、いろんなスーパーティーチャーとか居ますので、そういう人達に入ってもらって協議がなされております。

その中で浦郷委員さんもおっしゃったような、いわゆるシラバスの物も作ろうと取り組んでおりますけれど、一方で教科書会社自体も、デジタル版はまだ現在作れていないんですね。なぜかという、結局、理論的には作れるんですけど、実際使う中で

これをフィードバックしていったって、またもう一回たたき直しているんですけど、そこが今の現状であると思っています。理想系はありますけど。

(山口知事)

だから、むしろあまり確立していないのであれば、対話の中で、こいつどうやって使っていこうかって。だって、先生にとってもこうであるべきというのは無い訳で、生徒にとってもこうであるべきというのは無い訳で、だから、そういった意味でこいつを上手く使えればというね、対話の中でいろんな事が出来ていく訳だから、だからやはり私も凄く危惧したのが、一言で言うと、強制。先生は使わないかとか。生徒も使わんばいかとかね。そういうものでは無いんじゃないかなという、結局大事なのはソフトであって、「心」であるので、教育というのは。その為に、こいつが邪魔しちゃいかん訳だから、それは先生もいろいろ、生徒もいろいろだから、そこをよく踏まえた上でやっていけば、結果的にはこいつがあって良かったねっていう流れを作っていくという所をある程度申し合わせてやっていくと。

(福田副教育長)

今回、知事さんから現場の声をもう少し聞きなさいよと言っていたおかげで、我々、教育長も含めて、改めて子供たちを集めてもらって、1年間過ごした子供たちの声を聞いたり、先生方にも聞いたりすると、やっぱり我々が気づかなかった事も沢山ありましたので、それを踏まえて今、改善をどうすべきかということと、それから、浦郷委員さんからもあったように、どういうチャートを示すべきかということとをちょっと検討させていただいている状況です。

(山口知事)

皆さんも自分の身近な例をされたから話しますと、うちの娘でも、パソコンを勝手にやるわけですよ、親のパソコンをね。すると、確かに良い使い方をすると世界が広がっているように見える。今は世界のいろんな場面が動画で見られるので、わりとそういうサイトを開いていて、そういう時は後ろから見ていて、なんかいろんな事をやってるんだなと思う。ただ下手すると、ゲームばかりやっていることもあって、本当にこいつはもう使いようでね。そこの付き合い方に気をつけないと、意外と実は多いのが、逆にこいつに中毒になってしまうと、部屋から出て来ないような様な人もいます。日本人にもいっぱいいるんですよ。だからそのあたりの折り合い。

(西中統括本部長)

さっき聞いた2つの大学での授業の話聞いて私が思い出したのが、公務員生活を始めて、4、5年位たった時に、いわゆる1人1台、自分の事務机の上にパソコンが置かれるようになったんですよ。それまではそんなの無かったから、隣とか前とかこういう風に机が並んで、いろいろしゃべりながら、ああでもないない、こうでもないっていう会話をしながら、いろいろ議論をしながら仕事をしていたんですけど、これが置かれるようになってわりと黙っている奴が増えました。先輩が言われたんですけど、無駄話の中に意味がある会話があったと思うけどそういうのが無くなって、ちょっと仕事の効率がもしかしたら下がったかも知れない。意識して、そういう無駄話とかそういうのをせんといかんねというような事を、ちょうど係長くらいの頃に言われたのを思い出しました。

学校の現場って先生がいて生徒さんがいて、リアルな教室という空間がある訳じゃないですか。だからやっぱり折角そういう空間が物理的にあるので、やっぱり大教室で授業やっているときにみんなが聞いているわけじゃなくてゼミナールみたいな形で席替えだってできるわけだから、そういう会話の中で実際の授業でリアルな空間の充実、これは多分、どういった時代でも必要なんでしょうけれども、それ自体にやっぱり振り回されないようにするっていう意識は、持っておかないといかんのかなと。自分の経験から言うと、先輩からそういう風に言われたのが、そういえばあったなと思いだしました。

(牟田委員)

僕はですね、義務教育と言うのは、見て、聞いて、書いて、口に出して、そうやっていくものだとずっと思っていたんですよ。だから、パソコンが教育に入ってくるときには、どうかなと正直思ったんですけど、今、中3の息子が触っているのを見ると、結構使いこなしていて、無い頃の我々が五感の作用でしていた勉強と、彼らにとってはパソコンが第六感というのか、学び方の一つの手段なんじゃないかなと思うんです。だから知事は心配されるかもしれませんが、僕は使いこなすんじゃないかなと、逆に若い世代には期待しています。

(小林委員)

私もどうしてもデジタルにはまってしまふのが心配という状況があるので、デジタルもするけど、リアルな世界っていうのも充分あってこそデジタルかなっても思うので、ほんと小さい時からスマホをおもちや代わりにする子たちもいたりするので、そういうところはやっぱりお父さんお母さんたちにそういう事の危険性を伝えながら、リアルな五感を使った育ちを、そういう事もきちんと保障して、デジタルの方について欲しいなあと思います。検索でいろんな事を調べる事が出来るんですけども、そのいっぱい出てきた中から、自分が欲しい答えはどれなのかとか、本当に正しい答えはどんなのかを見つける為には、リアルな体験が無いと難しいと思うので、上手にバランスをとりながらしていかなければいけないなあと思います。

お母さんたちの中には、インターネットやったら怖い、ICTイコール怖いっていう風に絶対触れさせないという話をよく聞くんですけども、やっぱりその怖さは知らない者にとってみれば分かるんですけども、包丁とかはさみと一緒に、上手に使いながら上手い使い方を見つけていかないといけないなあと思うので、ちょっと保護者さんたちにも、ちょっとずつそういうところにも触れてもらいたいなあと思います。

(山口知事)

小林委員に伺いたかったのですが、3年間で5万円というのは保護者としてはどういう気持ちですか。うまく使ってこなせたらいいなあというぐらいですか。

(小林委員)

折角買ったんだから、上手く使って欲しいなあというのはありますね。やっぱりそれぞれの家庭によって、負担感っていうのは、当たり前のように5万円出せるところもあれば、やっとの思いでというところもあるんですよ。だからそういうところのご家庭の配慮は、本当に大事にしなければいけないなあと思います。うちは何とか、それこそお祝いとかを頂きながら出せたんですけども。本当に無理が無いように。これがある為に、高校進学が出来ないという事があつたら困る事ですので。そういうところの配慮っていうのは大事にしてもらいながら全ての子供たちに等しく環境が与えられる事を大事にしていきたいと思います。

(落合総括政策監)

あと5分程になりましたので、どうしてもこれだけは言っておきたいという部分がありましたらお願いします。

(森田委員)

障害を持った子供達で、外に行けない子供達にとっては、パソコンによってバーチャル関係も結局ベッドの上でも見ることも出来るし、感じる事も出来るしというのはとってもいい事だと思うんですね。何でもかんでもいいとは言わないんですけども、中にはやっぱりそういったところで、とても使ってよかったという子供たちがいるという事もわかっていただけるといいなあと思います。

(落合総括政策監)

ありがとうございます。他に、あればどうぞ。

(浦郷委員)

教育のICTに関することかわかりませんが、私のところでは、佐賀でバルーン大会がもう20数年前から開催されていますが、その頃から縁があってホームステイの依頼を、ここ2、3年は受けてないですけども、うちの子供たちが小さかった頃に受けていました。外国から来る人で、その子供さんが付いてきたりもするんですよ。それとバルーンに絡めて外国から来る青年たちがいて、あの子たちを見ていると、いわゆるスマホみたいなタイプの物とパソコンなんかの使いようが、体の一部みたいな使い方をするんですね。「いやあ流石だね」という感じで、日常的ないろんな情報を得たり、他の国のいろんな情報をとるのに、ごく当たり前みたいにやっている。

やっぱり、世界の趨勢で見れば確かにそういうような時代がきっと来るねという印象がずっとあった中で、今こういうICT教育の話が持ち上がってきたという時に、やはりそういう今まで来ていた外国の青年たちに比べると、ずいぶん日本は遅れているよねという印象があったんですが、ああいう物にきちんと対応していく為には、こういった教育のシステムも必要なんだなっていうのをしみじみ実感として感じています。

まだまだ本当に時間がかかりそうだなと思いますけれど、今後、日本が日本だけでどうにかやれるような世界では無い訳だからですね、世界で、ということを考えれば、そして佐賀は特にこういう小さな県の中で、世界へ発信しようよという風な思いも強く持ちながら進めているところでもあるので。

単に教育場面じゃ無くてもやっぱりいい道具なんですよ。だから、いい使い方を出来るように、やはり方向付けをしていかなければいかんなあという風に思います。

今はちょっとまだ導入したばかりで大変な事が多いですけど、やり始めた頃の事は、きっと実を結ぶという思いを強くもってやっていきたいです。

(音成委員)

従来の授業の型とがらっと変えないようなやり方でやるのが一番いいんじゃないでしょうか。やっぱり先生と子供が顔見合わせながら、それが一番理想ですよ。理想としてはね。

(浦郷委員)

それは絶対必要ですよ。そうじゃないと教員をしていて面白くないんですよ、多分。本気になってこう目と目を見合わせながらやかましく言ったり、ほめたりする事がないとですね。付き合い方ですね。とってもいい道具だと思います。

(落合総括政策監)

ありがとうございます。知事から最後にありますか。

(山口知事)

非常にいい論議だったというか、これいいね、総合教育会議。全く何の打ち合わせもせずに毎回こうやって、率直な意見交換をする訳で。

今日も思ったけれども、ICTと最初に高校1年生で付き合う前に、ちょっとしたこういう1時間の話し合いでも出来てからやるのかどうかによって、いきなりこいつがやってきてというのとは大きく違うと思うんですよ。

だから、こいつは何なんだという事をもうちょっとある程度整理して、佐賀がここで前を走るという事だったら、今もう走っているわけだから、そしたら是非こいつとの付き合い方というところも、世界の第一歩を走るぐらいの心構えでやらないと、それこそさっきの投資もそうだけど、もったいない話だし、県費の膨大な持ち込みもあるわけだから、そこの部分が大事だという風に私も思ってます。

まだ今これ、別の委員会の方で現場の先生方も入れながら議論をやっている途中なので、それがまたいずれ整理されるでしょうから、我々もこうやって注目をして、またこの議論ができたらいいなと思います。

(落合総括政策監)

ありがとうございます。教育委員会の方の検証作業も、今後、後半戦に入っていくと思いますので、本日の議論も参考にさせていただきながら検証作業を進めていただきたいと思います。今日はお忙しい中ご出席いただきまして、どうもありがとうございました。

以上を持ちまして第3回総合教育会議を終了いたします。